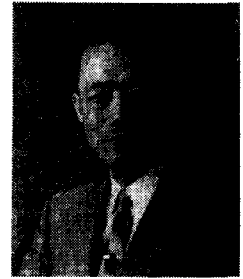


■ 年頭挨拶

新しい年を迎えて

日本オペレーションズ・リサーチ学会会長 伊理 正夫
東京大学



OR学会の皆様、明けましておめでとございます。本年も学会が着実に発展を続けるよう望むとともに、内外ともに多難なこの時期にこそORの本領を発揮して、次の世紀への展望を開くための活動を堅実に進めようではありませんか。以下に、日頃脳裏に去来することをとりとめもなく書き綴ってみました。論旨の不十分な点は、新春放言としてお許しください。

1. 不断の努力

ご存知のとおり日本オペレーションズ・リサーチ学会は満35歳になりました。会員数も3000人の大台に乗せ、学会活動も理論・実際両面において広く展開されているのは、学会設立にかかわられた諸先輩のおかげと、感謝の念を新たにす次第です。こここのところ約5年ごとに学会は、活動の長期計画を作りまた見直し、それに従って継続的に努力してきました。個人会員、法人会員の増加、公的地位の確立など、その成果は徐々にみえてきています。不断の努力を重ねることによって、さらに前進を続けましょう。

2. つねに若々しく

例えば本年還暦をむかえる会員は学会発足の時には弱冠25歳だったわけです。常に進取の気に富む若者が活躍の場を見いだせるような学会であり続けなければならないと思います。その点、最近の研究集会、シンポジウムその他学会関係の行事に参加して心強く感じるのは若い会員の方々が元気に活躍しておられることです。今後とも若い人々にとって魅力のある学会作り心がけますので、若い会員の方々も自分たちこそ学会の将来を

背負って立つのだという意気込みで、新しい仲間を誘い、思い切って活躍して頂きたいと存じます。

3. 初心忘るべからず

科学技術の革新、社会の変化の速さには驚くべきものがあります。しかし、今後進むべき道を探るとき最も大切なことは、古来言い古されていることではありますが「温故知新」、「初心忘るべからず」であります。この点、本学会には、長老の会員と若い会員とが、伝統的に、いつもざっくばらんに話し合える雰囲気があり、まことに嬉しいことです。この伝統はこれからも大事にしてゆきたいものです。

4. ORは皆の常識

私自身多少とも関係している学会は国内国外かなりな数ありますが、OR的な問題のとらえ方、ものの考え方、手法は、今や世の中のいたるところで使われていると言って過言ではないと感じます。そのような意味でのORの普及に比べて、OR学会の会員数の伸びがそれほどどまぎましくないのはなぜでしょうか。狭い意味でのORの専門家の集まりというだけでなく、いわゆる横型の学会としての機能もっと重視して、他の学会に主たる活躍場所をもってORが副専攻の人たちにもどしどし参画してもらって、お互いに刺激しあい、利しあえるようにしましょう。

5. 好景気の時にはOR、不景気の時こそOR

ORは別名経営の科学とも呼ばれることがある

くらいですから、好景気の時に大いに役に立つ学問・手法であるのはいうまでもないとして、じつは今日のような不景気の時にこそ重要なものであるはずです。われわれには、それを実践で示す役目があるのではないのでしょうか。この点、企業関係の方々のご理解とご奮闘に期待するところ大です。

6. 縦にも横にも幅の広さを

幅が広く奥が深いことでは、ORという分野は他に類を見ないものでありましょう。数学の一分野と見まがうばかりの研究をしている人から、生産現場で活躍している方々、そして経営のトップの方々、国の政策にかかわっている人々、等々、理論から実務までの幅の広さが広いとともに、同じ実務家であっても、個人企業、中堅企業、大企業と、それぞれかなり異なる問題をかかえておられます。学会全体としては、個人企業、中堅企業の方々との交流も今まで以上に盛んにしてゆく必要があるでしょう。そして最も大切なことは、学会活動を通じて、これら縦にも横にも幅広く分布した会員の人たちが、お互いに他の人たちの問題意識を理解し、互いに刺激し合い助け合うことです。学会の最大の存在意義は、まさに、このような相互交流にあるのです。多くの先輩が繰り返し強調してこられたように、理論家が理論だけに凝り固まってORの原点を忘れ実務家が理論を蔑視するようになったら、学会に未来はありません。

7. 第1歩は参加

日本には4桁で数えるほど多くの学会があるといわれますが、それらの中で本学会は中規模学会であるといえましょう。全国的な、また各支部ごとの、そして研究部会単位で催される、研究発表会、シンポジウム、セミナー、サロン等々いろいろな行事があります。これらの行事への参加者数の学会員総数に対する割合は、OR学会は他学会

に比べてかなり大きいのではないかと思います。春秋の研究発表会への参加者の数が次第に増加してきているのも喜ばしい傾向です。上の諸項目に述べたような学会活動の活発化の第1歩は、なるべく多くの会員が各種の学会行事に参加することです。学会は、参加することの意義が参加者にとっても大きいような行事の計画を常に心がけていますが、会員諸氏からのご意見やご提案も大歓迎です。

8. 世界が注目する日本のOR

真の意味で日本が豊かになったかどうかは甚だ心許ないですが、少なくとも海外からはそう見られているので、日本の技術、経済、社会に対する外からの関心は非常に強く、当然のことながら日本のOR活動に対しても世界の注目が集まっています。国際学会の組織や国際学術雑誌の編集に関係している人たちは、そのことをひしひしと感じておられることと思います。一方、OR学会関係者の国際的活躍も、それこそ35年前には想像できなかったくらい、活発になっています。OR学会も、世界への情報発信基地の1つになることが期待されているのです。今年は、3年ごとに開催されているIFORS(国際OR学会連合)大会がポルトガルのリズボア(リスボン)で開かれます。わが国からは刀根薫先生が大会のプログラム委員に加わっておられます。ぜひ大勢で参加してわが国のORを世界の人々に見てもらおうではありませんか。また、IFORSのアジア太平洋地域のサブグループであるAPORSの会長職を昨年から3年間わが国が引き受けることになり、来年夏には本学会主催で〔元会長近藤次郎先生(現日本学術会議会長)を会議議長として戴き、前副会長長谷川利治先生(京都大学教授)が組織委員長、私が国際プログラム委員会委員長となって〕第3回目のAPORS大会が福岡市において開催される予定です。大会の成功へ向けて皆様の絶大なご協力をお願いします。